◆3館連携特別展「武家の古都・鎌倉」関連シンポジウム　基調講演②◆

清水眞澄さん講演「武家の古都・鎌倉の文化財」

県立歴史博物館・県立金沢文庫・鎌倉国宝館にて開催された「世界遺産登録推進特別展」の関連シンポジウムが、平成24年11月11日(日)にきらら鎌倉(鎌倉生涯学習センター)で開催され、五味文彦さん(放送大学教授・東京大学名誉教授)、清水眞澄さん(三井記念美術館館長・成城大学前学長)の基調講演と3館の館長を加えたシンポジウムが行われました。前号に続いて、清水眞澄さんの講演要旨をお届けします。

清水 眞澄さん
三井記念美術館館長・成城大学前学長

基調講演要旨

3館連携特別展は、「武家の古都・鎌倉」の文化遺産を支える文化財の展示です。世界遺産登録の要件である完全性および真実性の観点から、鎌倉時代から継承されている文化財が県立歴史博物館、金沢文庫、鎌倉国宝館で展示されていることは大変重要です。専門である彫刻史の観点から「武家の古都・鎌倉」の有形文化財について話します。

鎌倉大仏

国宝の指定は有形文化財の彫刻ですが、彫刻であるとともに記念碑的なものと考えられます。『吾妻鏡』によれば、このブロンズ像が建立されたのは建長4年(1252年)ですが、その前に木造の大仏像があり、直接幕府がこれに関わった記録は少ないものの、幕府の庇護があって建立された可能性が高いと考えられています。

大仏の鋳造は8段に分けて造られています。この技術は大変高いもので、東大寺の大仏とは違う鋳造技法です。

中国文化を輸入した独特の形

鎌倉時代以降の文化、特に彫刻には中国大陸の影響を見ることができますが、それを日本あるいは鎌倉で、独自のものとして消化して、新たな彫刻や文化を作り上げていることが重要です。円応寺の木造初江王坐像は、建長3年、大仏が鋳造され始めたその前の年に幸有という仏師が造ったと、胎内の銘文に記されています。立膝をして斜に構えて坐り、裾を長く流していることや、衣文という襞が波打っているのも、中国の絵画にも見られるところです。もうひとつは、半跏像です。横須賀の清雲寺瀧見観音像、建長寺の白衣観音像は膝を立てて片足を降ろしている宋代の像です。この形の像が日本に入ると、右のほうに立膝をしていたのを横にし、左手ではなく右手を地につくようになり、より合理的な形に変わります。禅居院の観音菩薩像、東慶寺の水月観音像があげられます。また、技術としては鎌倉にだけ遺されている「土文」があります。源流は大陸ですが、こうした形や技術が日本に入ってくると、巧みに利用して鎌倉の新しい文化を作ったのでしょう。

禅宗の文化財

建長寺の仏殿や、瑞泉寺の庭園の在り方、伽藍の構成などは、直輸入された中国禅を基に、日本独自のものとして作り上げています。円覚寺の舎利殿、寿福寺の参道などは非常に禅宗らしい佇まいです。こうした文化財のひとつに、禅宗の頂相(ちんぞう)があります。鎌倉時代中期から後期にかけて高僧の像に倣って彫刻が造られ、記念碑的な意味や祖師像として礼拝の対象にされました。建長寺の蘭渓道隆像と円覚寺の無学祖元像は13世紀後半の作で、日本の頂相彫刻ではもっとも古い像です。また少し時代が下り、正統院の高峰顕日像と瑞泉寺の夢窓国師像等の頂相彫刻が伝えられています。

釈迦如来は一般的に、冠やネックレス等の装身具を着けていませんが、宝冠をつけている釈迦、「華厳の釈迦」が13世紀の中頃に、中国の禅宗とともに入ってきました。建長寺や円覚寺白雲庵の釈迦如来像等、14世紀になるとかなり造られています。

文化財を保管し継承する重要性

最後に今回、県立歴史博物館で展示されている出土品の数多いことに驚いています。漆の椀や皿、石塔など、実際にはこの何倍、何十倍、もっと多くの出土品がありますので、これらを保管し次世代に伝えていく施設は重要です。鎌倉にはこのように多くの文化財が残っていますので、早く世界遺産に認定されることが望ましいと考えています。